第三学年　国語科学習指導案

日　時　令和六年十月二十四日（木）
場　所　関市立緑ヶ丘中学校（三年六組教室）
学　級　三年六組（男子 十九名・女子 十五名　計 三十四名）
授業者　小川　友也

一、単元名「いにしえの心を受け継ぐ」　教材名　夏草――「おくのほそ道」から

二、単元および教材について

「おくのほそ道」は、松尾芭蕉が元禄時代に著した紀行文であり、日本古典における代表的な紀行文とも言える作品である。また、芭蕉の人生観が強く反映された作品でもある。作品構成としては、実際に芭蕉が訪れた名跡を見て感じたことと、そこで詠んだとされる俳句が添えられる俳諧紀行文である。芭蕉が感じたことが地の文で書かれ、その内容を集約した形として俳句があることから、俳句のみを鑑賞するよりも、深い味わいがしやすいと考える。したがって、古典を苦手とする生徒でも取り掛かりやすく、古典の世界に親しむことができると考える。また、「古典を楽しむ」とは、現代世界にはない昔の人のものの考え方に触れ、新たな発見をし、古典の世界や昔の人への想像を駆り立てられたり、現代人にも共感できる人々の思いやものの見方など、時代を超えた普遍的な価値に触れたりすることにあると考える。

特に「おくのほそ道」は芭蕉の「旅」に対する思いや「自然」に対するものの見方・考え方、また「人生観」が表れている。そこから新たな発見や共感できる点などを捉え、現代人の見方や考え方と比較することで、時代を越えた普遍的な価値を見出すことができる教材だと考える。

そこで、本単元のねらいを『『おくのほそ道』に表れた松尾芭蕉の思いや価値観を捉え、自分の考えを形成することができる」とし、人間、社会、自然などについての考えを広げたり深めたりすることで、古典の世界に親しみをもてるようにしたい。

三、生徒の実態

国語の授業において、前向きに学習課題に取り組むことができる生徒が多い。また、仲間と関わりながら学習に取り組むこともできる。しかし、「古典は好きである」という質問に対して、「好き」と答えた生徒は二十六％に対して、「嫌い」と答えた生徒は三十五％いた。（「どちらでもない」と答えた生徒は三十九％）また、「古典は得意である」という質問に対しては、「得意」と答えた生徒は十九％に対して、「苦手」と答えた生徒は三十六％いた。（「どちらでもない」と答えた生徒は四十五％）理由は、現代と違う意味の言葉や使わない言葉があり、読みづらく、内容理解ができないことが挙げられる。また、昔の出来事や人の思いは、身近なものではなく、現代の自分達には遠く離れたものであると感じている。それにより「理解しにくいもの」という先入観から、苦手意識を始めから抱いている生徒が多いと考えられる。

そこで、前教材「君待つと　万葉・古今・新古今」では、和歌に表れた作者の心情や見た情景を想像し、鑑賞することを大切にしてきた。その中で、「恋」や「家族」に関する和歌から、作者の思いに共感したり、「自然」に関する和歌から、情景を想像し、作者の感じ方に共感を抱いたりしてきた。遠く離れた昔の人と見方や感じ方は、現代を生きる自分達と同じであり、古人と「心」の面でつながりをもつことができた。

本教材である「おくのほそ道」においても、自分と芭蕉を比較しながら作品を読み味わい、古典を身近に感じ、親しみを持てるようにしたい。そして、古典学習を通して、「昔の人の思いを想像することはおもしろい」と感じ、古典を学習する意義を自分なりに見つけ、今後の自分自身の生き方に生かせるようにしたい。

四、「生きてはたらく言語能力」の育成について

中学校学習指導要領解説　「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」　（中）第三学年より

伝統的な言語文化に関する事項

ア　歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。

「生きてはたらく言語能力」を具体化する

―「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」学習指導要領―より

ア　伝統的な言語文化に関する事項

作者のものの見方や考え方を捉え、自分の体験・見聞と結び付け、俳諧紀行文をつくっている。

本教材では、学習指導要領の第三学年「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと」を具体化して、単元の出口に言語活動「岐阜県内の名所を紹介する『ぎふのほそ道』を書こう」を位置付ける。「おくのほそ道」に書かれた芭蕉の思いは、地の文に書かれている内容を理解することが大切であり、その上で、思いが集約された俳句を読み味わうことが重要である。冒頭部分では、芭蕉の旅への思いと人生観が記され、平泉の部分では、人間の営みのはかなさと自然の悠久さが記されている。どちらも地の文を理解し、俳句を詠み味わうことで、時代が変わっても、現代の自分達と変わるものと変わらないものへの思いを巡らすことができ、古典を身近なものに感じることにつながると考える。それらを生かし、芭蕉になりきり、岐阜県内の名所や思い出深い所を古語や歴史的仮名遣いを用いて書き、最後に俳句を添え、「ぎふのほそ道」づくりを行う。そうすることで、古典の世界と自分の見聞や体験とがつながり、より古典の世界に親しむことにつながると考える。また、同じ場所であっても書き手による地の文や俳句の違いを味わい、そこに表れる書き手の思いを感じ取らせ、言語感覚を磨きたいと考える。

五、研究とのかかわり　言語文化部会研究テーマより

言語に親しみ、社会生活につなげる能力の育成

～「言葉への自覚」を高める指導の工夫～

〈指導計画の工夫〉

単元の出口の言語活動に「ぎふのほそ道」づくりを位置づけた。「ものの見方や考え方を深め、古典の世界に親しむ」ためには、古人の人物像や価値観を捉え、芭蕉になりきって郷土を紹介する俳諧紀行文を作成することが効果的であると考えたからである。地の文の内容が俳句に集約されていることを学び、その構成を見習って書く活動の位置づけは、生徒が主体的に学習に取り組むことにつながり、古典に親しみをもつことができると考えた。また、単位時間ごとのまとめの振り返りとは別に、「ぎふのほそ道」に向けた単元を貫くワークシートを活用し、各単位時間が出口の言語活動につながっていることを視覚化する。ワークシートには、「ぎふのほそ道」づくりに生かす技法や事柄を記録し、単元を学習する目的の意識づけを行っていく。

〈指導援助の工夫〉

本教材の「おくのほそ道」は、芭蕉が推敲を重ねて完成させた作品である。この推敲をして選び抜かれた言葉に作者の意図や思いがあると考える。そこで、思いが集約された俳句に着目し、推敲される前の俳句と比べる活動を設け、変更した意図、変更したことによる印象の違い、言葉の効果などを考える場を位置づけた。そうすることで、より言語感覚が磨かれ、言葉を大切にしようとする意識が高まると考える。また、松尾芭蕉のような世に名を残す人であっても、言葉を大切にして

いることに気付かせたい。芭蕉をより身近な存在と感じることで、古典の世界を身近に感じることができるようにしたい。

〈評価の工夫〉

振り返りの積み重ねが、自己の高まりを実感できると考える。そこで、単位時間における学習のまとめの書き方を二段落構成とする。一段落目には、本時と前回までの学習とのつながりを書き、二段落目には、本時の学習でわかった芭蕉のものの見方や考え方を捉えて書くようにする。そうすることにより、場面のつながりとの理解度も分かり、つながりを考える意識化が図れると考えられる。また、指導と評価の一体化を図ることにつながると考える。

単元の出口の活動である「ぎふのほそ道」づくりでは、歴史的仮名遣いや古語を用いて県内の名所や思い出深い場所を紹介し、俳句を添える。中学校学習指導要領国語編の「思考力・判断力・表現力」 C 読むこと 「エ 文章を読んで 考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつこと。」に示すような考えの形成、共有ができる言語活動として位置付けている。「おくのほそ道」を残した芭蕉の書き方（地の文と俳句のつながり）や著し方（価値観や人生観を含めて書くこと）など、学習したことを生かした言語活動を通して、身に付けた資質・能力を振り返るとともに、古典に親しみをもって取り組んでいることも関連付けて評価を行いたい。

六、単元指導計画（全六時間）

【単元のねらい】

・歴史的背景を想像しながら「おくのほそ道」を読み、芭蕉のものの見方や感じ方を捉え、人間、社会、自然などについて自分の考えを持つことができる。

・芭蕉の考えを想像しながら、古語を用いて俳諧紀行文を書き、古典に親しむことができる。

【単元の評価規準】

・芭蕉のものの見方や感じ方と自分の考え方を比較しながら、人間、社会、自然などについて、自分の考えを広げたり深めたりしている。

・芭蕉の立場になり、古語を用いて俳諧紀行文を書き、古典に親しんでいる。

七、本時のねらい

「おくのほそ道」の「2」の平泉の後半から、自然と人間の関わり方についての芭蕉の見方を捉え、自然の力による損害を防ごうとする人間の営みに心動かされた芭蕉の思いを、俳句から考えることができる。

八、本時の展開（四／六）

	学習活動	指導・援助
導入	◎これまでの学習を振り返る。 ・芭蕉は旅に人生をかけてきた。 ・人間の行いは儚いが、自然は変わらず残っていた。 ◎課題提示 芭蕉はこの俳句でどんなことを伝えたかったのだろう。	・前時に学習した芭蕉の自然と人間との在り方についての考え方を振り返り、本時の学習の方向付けを行う。 ・俳句を推敲して変更した点に芭蕉の思いが示されていることを伝え、変更理由を考える必然性を持たせ、学習課題に向かわせる。
展開	◎全体で平泉の後半部分を音読し、地の文の内容を知る。 地の文の感想交流 ・人間の手によって残っている光堂に感動した。 ・自然に朽ち果てることなく、千年前をしのぶことができてよかった。 ◎推敲前の俳句を提示する。 俳句二句を読み比べをし、推敲した理由を考える。 【一人読み】→【班交流】→【全体交流】 「五月雨の降り残してや光堂」（推敲後） ・「降り残してや」から、自然の力をもってしても人間の知恵や力には及ばなかったことを感じた。 ・「夏草や」の俳句では、自然に対する人間の儚さを感じて悲しんでいたが、光堂を見て人間が自然の力から建物を守ったことに感銘を受けた。 「五月雨や年々降るも五百たび」（推敲前） ・五百年もの長い間、五月雨に降られ続けたことを表そうとしていた。 ・どちらにも「五月雨」は入っている。長く続く雨の力を示したかったと思う。こちらの俳句は、自然の出来事のみを表しているような俳句に感じる。	〈読みを深める手だて〉 ・俳句と地の文を関連させ、芭蕉が見た情景と、芭蕉が想像したことを考えさせる。 ・二句の俳句に使われた切れ字「や」の位置に着目させ、芭蕉の感動の中心を考えさせる。 〈交流における手立て〉 ・推敲前の俳句と比べさせ、芭蕉の思いや、言葉の効果について話し合わせる。 ・生徒が挙げた根拠や考えを把握し、意図的指名により、話し合いの深まりにつなげる。
終末	◎本時の学習から考えた芭蕉の思いをまとめ、書く。 どんなに権力を誇り、栄華を極めていてもいつかは滅んでいく、儚い人間の営みに対し、変わらない自然の姿に悠久さを感じ、芭蕉は落胆し、涙を流した。 しかし、芭蕉は、自然に朽ち果てないように人間の手によって守られた光堂を見て、感動した。千年の時を超えても昔をしのぶことができた喜びから、人間の力や知恵の偉大さ・素晴らしさを、俳句を通して伝えたかったのだと思う。 ・推敲して変更したのは、長く続く五月雨からも人間の知恵や行いによって光堂を守れたことを強調したかったからだと思う。 ・芭蕉は、人間の営みの儚さに落胆していたからこそ、後世に建物を残そうとする人の行いに対して感動が大きかったのだと思う。だから、雨が光堂を朽ち果てさせることができなかったと表したくて「降り残してや光堂」に改めたのだと思う。	・前回までの学習と繋げてまとめを書くようにする。 《評価規準》 平泉の部分から、自然に対する人間の営みについての芭蕉の見方を捉え、俳句を鑑賞している。 【読む（イ）】 （振り返り記述） 地の文と俳句の関係性に注意しながら芭蕉の思いを想像し、前時と本時の内容をつなげてまとめを書いている。 【言語文化（ア）】 （振り返り記述）

中学校国語科

単元構想表（ver.3.2）

学年 ① ② ③　領域 Ⓐ Ⓑ Ⓒ

言語活動例 ア イ ウ 他　指導事項

（第3学年）　単元名：いにしえの心を受け継ぐ
「夏草―『おくのほそ道』から」

指導者：関市立緑ヶ丘中学校　教諭　小川　友也

All Clear

言語活動例	学年	領域	記号	
	3年	C領域	イ	詩歌や小説などを読み，批評したり，考えたことなどを伝え合ったりする活動。

言語活動：岐阜県内の名所を紹介する「ぎふのほそ道」を書こう

学年	領域	記号	指導事項	重点化	学習活動	評価規準	留意点他	時
			導入（学習への見通し）		「おくのほそ道」の歴史的背景を知り、芭蕉や作品の理解を深め、関心をもつとともに、単元全体の学習活動の見通しをもつ。	松尾芭蕉と作品の概略を知り、古典に関心をもっている。 (振り返り記述)	(指)芭蕉が残した「おくのほそ道」に興味をもたせ、本単元に位置づけた「ぎふのほそ道」づくりに向けた見通しがもてるようにする。 (評)振り返り記述から評価する。	①
3年	C領域	ア	構造と内容の把握 文章の種類を踏まえて，論理や物語の展開の仕方などを捉えること。		おくのほそ道」の「1」の冒頭から、芭蕉の旅に対する考えと人生観を捉え、俳句に込められた芭蕉の思いを考える。	「1」の冒頭から、芭蕉にとっての旅に対する考えを捉え、俳句を鑑賞している。 (振り返り記述)	(指)原文と現代語訳が書かれたワークシートを用意し、芭蕉の旅をする目的や覚悟、旅と人生観との関わりを捉えられるようにする。 (評)振り返り記述から評価する。	②
3年	C領域	イ	精査・解釈 文章を批判的に読みながら，文章に表れているものの見方や考え方について考えること。		「おくのほそ道」の「2」の平泉の前半から、平泉の過去と現在の情景を比較し、俳句に込められた芭蕉の思いを考える。	「2」の平泉の前半から、人間の営みの儚さと自然の雄大さに対する考えを捉え、俳句を鑑賞している。 (振り返り記述)	(指)地の文の内容が集約されたものが俳句であることを伝え、俳句をより深く鑑賞できるようにする。 (評)振り返り記述から評価する。	③
3年	C領域	ウ	精査・解釈 文章の構成や論理の展開，表現の仕方について評価すること。	○	「おくのほそ道」の「2」の平泉の後半から、自然と人間の関わり方についての芭蕉の見方を捉え、自然の力による損害を防ごうとする人間の営みに心動かされた芭蕉の思いを、俳句から考える。	「2」の平泉の後半から、自然に対する人間の営みについての芭蕉の見方を捉え、俳句を鑑賞している。 (振り返り記述)	(指)地の文と俳句とのつながりを捉えつつ、推敲前の俳句を提示し、変更した理由を考えることを通して、芭蕉の思いをより深く捉えられるようにする。 (評)振り返り記述から評価する。	④
3年	C領域	エ	考えの形成 文章を読んで考えを広げたり深めたりして，人間，社会，自然などについて，自分の意見をもつこと。	◎	今までの学習からつかんだ芭蕉のものの見方や考え方を生かし、岐阜の名所を古語を用いて紹介するとともに、俳句で添えて「ぎふのほそ道」をつくる。	自分の紹介したい場所を古語を用いて紹介し、俳句を添えて「ぎふのほぞ道」を作成している。 (ワークシート)	(指)紹介する名所をタブレットで画像を出し、想像しやすくさせたり、、できる限り歴史的仮名遣いや古語を用いて地の文をつくり、内容が集約された俳句がつくれるように助言をする。	⑤
		オ						
			まとめ（学習の振り返り）		各自が作成した「ぎふのほそ道」を交流し、交流を通して感じたことや考えたことをまとめ、単元で学んだことを振り返る。	「ぎふのほそ道」を交流したことから、人のものの見方や感じ方について自分の考えをまとめている。 (ワークシート)	(指)それぞれの「ぎふのほそ道」のよさを見つけ、古人と現代人や自分と仲間との共通点や相違点などをまとめさせる。 (評)「ぎふのほそ道」と、交流からまとめたものを評価する。	⑥

関連する〔知識及び技能〕	学年			指導事項	評価規準	留意点他	時
(1)言葉の特徴や使い方に関する事項 (2)情報の扱い方に関する事項 (3)我が国の言語文化に関する事項	3年	(3)	ア	伝統的な言語文化 歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して，その世界に親しむこと。	地の文と俳句の関係性に注意しながら芭蕉の思いを想像し、前時と本時の内容をつなげてまとめを書いている。 （振り返り記述）	（評）１段落目には、本時と前回までの学習とのつながりを書き、２段落目には、本時の学習でわかった芭蕉のものの見方や考え方を捉えて書いたまとめを評価する。	② ③ ④
	3年	(3)	イ	伝統的な言語文化 長く親しまれている言葉や古典の一節を引用するなどして使うこと。	自分が紹介したい名所を選び、歴史的仮名遣いや古語を用いて、「ぎふのほそ道」を書いている。 （ワークシート）	（評）岐阜の名所を歴史的仮名遣いや古語を用いて紹介し、その内容を表す俳句を添えた「ぎふのほそ道」を評価する。	⑤ ⑥

学びに向かう力，人間性等に関する評価（主体的に学習に取り組む態度）	評価規準	留意点他
	様々な見方で読み味わい、自分の考えをもって振り返りを書いたり、「ぎふのほそ道」を書いたりしている。 （振り返り記述・ワークシート・観察）	（評）単元全体を通した学習活動の様子と、毎回の振り返り及び「ぎふのほそ道」で評価する。

※「留意点　他」の記号…(指)指導に当たっての留意点，(評)評価に対しての留意点，(他)他の学習活動のアイデア，(教)教材・教具の工夫